同志社に入学したころ

大塚節治

上り列車で広島駅をたったのは三月二七日の朝一一時三五分であった。車中商人の会話オマッカ、オマヘンカ……の初めてきく上方言葉、移りゆく車外の景色、同行の友U君との対話、胸一ぱいの同志社入学の希望など県外への初旅をたのしいものにしてくれた。

汽車が大阪についたのは翌日の午前一時であった。経過時間は一三時間と三〇分、汽車賃は二円三四銭であった。汽車は大阪止まりであったからやむなく下車した。駅前には二階建ての旅館が並んでいた。その一つに入った。明治三六年の三月、大阪は博覧会のため、大抵の旅館は満員とみえた。二人は先ず宿泊料をきいた。一泊二食六〇銭。二人は勇を鼓して五〇銭にねぎった。番頭は快く五〇銭にまけてくれた。二階に上りくつろいで夕食にとりかかったのであるが、なんと御飯は茶碗の底にただ一口、田舎出の少年はもっと沢山入れるよう、女中に要求し得なかった。三杯かえて唯三口、翌朝の食事も同様であった。おかずはどんなものであったかは覚えていない。

明けて二八日、朝八時四三分の汽車で京都に向った。ちょうど一〇時に京都についた。所要時間一時間と一五分、汽車賃四五銭。二人は車をつらねて油小路北小路角、河内屋旅館に入った。車夫が大学に入学されるのだと馬鹿にした追従をいった。郷里の医師S先生からの紹介状を旅館主大橋忠兵衛氏に渡し、しばらくの宿泊をたのんだ。主人は六〇恰好の好人物でわれら少年を快く迎えてくれた。同日の午後早速徒歩で同志社を訪ねた。春休み中で校庭には学生の姿は見えなかったが、神学館東側のテニスコートで、テニスをやっている学生が数名いた。広島できいたアルバイト学生の学園同志社の空気はどこにもみえなかった。これが最初の不安であった。

宿の主人に下宿やアルバイトの世話をたのんだ。下宿は数日のうちに見つけてくれ、四月一日に下魚棚通り堀川西入る、奥村順次郎氏宅の離六畳に移った。奥村家の主人には逐に会わずじまいであったが、七〇恰好の老夫人と三〇近くのお嬢さんがいて、なにくれとなくお世話を蒙った。室料一ケ月二円五〇銭

であった。ここでわれらの自炊生活が始まったのであるが食事はとかく不規則となり、一日分の御飯五合を一ぺんに食べてしまうこともたびたびあった。

学校は四月九日から始まった。入学金と一学期間の学費合せて七円八〇銭であった。毎日油小路を北へ、中立売で烏丸に出て烏丸を北へ同志社へと、約一ケ月同じ途を歩いた。途中金箔を打つカタカタとひびく槌の音が心地よく今も耳底に残っている。当時電車は駅前から七条内浜へ、河原町通りを北へ四条まで、四条で木屋町に出て高瀬川に沿うて北へ二条まで、二条で西へ寺町に出て、寺町を北へ今出川まで通じていた。単線であったから速度は歩くのとさして違いはなかった。

*

学校は朝七時半公会堂（チャペル）の講話から始まり、八時から学課、午前四時間、午後二時間、土曜、日曜は休み、第一学期は六月末で終り、夏休は七、八月と九月初め約一〇日間、今日と殆んど変りはない。

われらのクラスは約三〇名で、一年生はA、Bの二級であった。自分はB組であったと思う。卒業のときはちようどその半数に減じた。学課は修身、国語、漢文、算術、英訳読、英文典、英会話、英習字、日本史、日本地理、鉱物、図画、体操であったと記憶する。

先生は修身大塚素、国語三輪源造、漢文門田新六、英語塩瀬千治、歴史は一学期山口金作、二学期以後横山健堂、地理、鉱物加藤延年、算術鈴木、図画守住勇魚、体操後藤等それぞれの先生が担当された。同志社の精神教育をたたき込んでくれた人は大塚素先生であった。先生は幹事という役で校長代行のような立場にあった。先生のクラスは毎時間感激の涙を催した。この人は三河の人で牧野虎次先生などと同様に始め監獄の教誨師をつとめ、同志社を去ってからは満鉄に入り、その社会部を建設した人である。その令弟大塚小一郎氏は、明治三〇年高等普通学校卒業の校友で、昭和の初め日本銀行京都支店長として京都に在任、同志社にもしばしば見えて当時の法学部長今中次麿氏や私などと同志社教育につき意見をたたかわしたものである。後本店銀行局長となって東京に移られた。その令息一也氏は富士銀行京都支店長として、昭和三〇年頃京都在住ロータリ会員として交った。私と同姓であるが家の関係はない。

歴史の横山健堂先生は当時京都大学大学院で研究中であった。あるときわれらのクラスの最年長者柿田君というのが歴史の教授法について先生に注文をつけた。同君は同志社にくるまで某医学校に居たとかで鼻下にひげを蓄えた紳士であった。当時のクラスは年齢不揃で十二歳から二十五歳位までいろいろであった。柿田君の注文が何であったかは覚えていないが、健堂先生の返答は今尚記憶に新たである。曰く、昔、支那に公孫龍という者がいて、堅白同異の説を称えた。即ち、白く且つ堅い石がある。目で見ると白いが、堅いことはわからぬ。手でさわると堅いことはわかるが白いことはわからぬ。故に白い石と堅い石と同一でない。また白馬は馬にあらずとも云った。馬は

白馬、赤馬、黒馬、斑馬等を含むが白馬は白馬のみである。故に白馬は馬にあらずというにある。この詭弁をやめるよう公孫龍に忠言した人がある。公孫龍はこの奇説のゆえに自分の存在理由がある。これを捨てると自分の存在理由はない、故に捨てられないと答えた。横山先生曰く、自分には自分の流儀があって自分の教え方はかえられない。クラスのもの一同は先生の博学と才気に烟にまかれてしまった。柿田君はそれで沈黙してしまった。

算術の先生が残してくれた記憶が一つある。先生は虫歯に苦労しておられた。あるとき一升桝（ます）の容積は何立方分あるかという問題に出会した。先生はそれを覚えるに「虫歯に悩む」（六四八二七）という便法を示した。爾来一升桝の容積は六万四千八百二七立方分と覚えている。

加藤延年先生が旧東京市の一五区の名前を暗記する方法として歌をもって覚え易く示されたことは有名であった。

＊

下魚の棚通りは七条通りのも一つ南の通りでそこから毎日同志社に通学することは苦痛ではなかったが、労力と時間の浪費であった。同級生にT君というのがいて、その紹介により、五月九日新椹木町丸太町下るところの木村ウメという素人下宿に移った。奥村氏へは感謝の印に砂糖一箱を呈した。

木村に移ってから約二週間後に同級生堀内清君の世話により竹屋町寺町西入る南側、巽富栄という宅に転居した。六畳一室月二円であった。五月二三日のことである。木村下宿は同宿者が多く勉強ができにくかったゆえである。この家の主人はどこかに外勤していたようである。妻君の富栄さんはメリヤスの機械編みをして一家を立てていた。因に八十年来、多くの人々の厚意に浴したが今日なお交りをつづけている者は多くはない。堀内さんはその一人である。

＊

ここで同級生のことにつき一言する。先きにあげた柿田君やT君は途中退学してその消息は詳かでない。その他、中退者で異色のあった者に大石七分（ステイブン）君がいる。一二歳の美少年で西洋流の服装をしていた。その兄さんは大石真己（マコ）君で一年上にいた。紀州の出身で社会主義を宣伝していたように思う。平民新聞という小型の新聞を配布していた。いま一人城戸範輔君という豪傑肌の生徒がいた。彼は常に制服に下駄ばきで教室や廊下を闊歩していた。当時登校には制服と靴ときめられていた。和服者は許可証を必要とした。現存者は僅か一〇名となっている。年に一、二度の文通をしている者には阿部賢一君（前早大総長）中江利郎君（元千葉農場試験長）三宅幸右エ門君（稚内教育委員）後から加わった湯浅八郎君（国際キリスト教大学名誉総長、元同志社総長）等がある。親友の多くはすでに幽界にある。

竹屋町に移って間もないころ、五厘の饅頭二〇個を求め、御苑内府立図書館の近処で独りこっそりとたべてしまった。U君

とともにたべなかった罰はてきめんで腹をこわし、河原町丸太町上る星野医院のお世話になった。無茶をしてはいけない。赤痢になるぞと叱られた。この医師先生は校友田辺繁子女史（法博・専修大学教授）の厳父であった。後に寄宿に入ってから私の利己心は開眼された。寄宿舎では好い物があれば大抵寮長室に集って皆で一緒にたべた。私にとってこれは大きな発見であった。なお、いま一つ寮で驚いたことがある。それは寮の便所に猥褻な落書がなく、寮内に猥談がなかったことであった。私は入寮して初めて同志社の利他心と純潔心というものを知ったのである。

＊

私が同志社にきたのはアルバイトをしながら勉強ができると聞いたからである。ところがなかなかそれは容易なことではなかった。はじめ二、三年は全く駄目であった。そこで後に述べるように二学期末をもって退学するに至ったのである。五月初旬前出のT君の紹介で、A家に糸繰りの手伝仕事を得た。二条麩屋町の辺であった。学校からかえり、四時頃から夜の九時頃まで働いた。A氏は私に同情して特に私に仕事を与えてくれたのである。ところが私が世話人T君の感情を害したのが原因でこの仕事は一ケ月位でやめねばならなくなった。T君に喫煙の習慣があり、それをやめるよう忠言したのがもとである。私の忠言の仕方が悪かったのである。軽卒で直情径行で他人の感情を害したことは成人になっても度々あった。まことに恥しい次第である。

この仕事は約二〇日間でやめた。給料一円五〇銭を受けた。六月に入りU君と共同で牛乳の得意を作るために学業の余暇に方々を歩いた。これは最もいやな仕事であった。六月六日から配達を始めた。仕入れの店は河原町丸太町上る出口牛乳店であったと思う。ここの主人には色々お世話になった。U君と交替で配った。これも六月末帰省するまでで、以後休み中は後を牛乳店に託した。因に牛乳は一本（一合）三銭ないし三銭五厘で利益は一銭ないし一銭五厘であった。三〇本（三升）の得意があれば一ケ月九円の利益があるから一人の生活費と学費はまかなえたのである。U君と私はそこまでこの仕事を伸ばすことができなかった。精々一〇本位であったと思う。

さて六月下旬期末試験がすむと帰心矢の如く六月二八日出発途中神戸に下車、湊川神社に参拝し広島についたのが夜の一一時半であった。教員養成所時代の下宿寺内旅館に一泊ののち二九日親許に帰った。

三月出郷のときは「男児立志出郷関。学若無成死不還。埋骨豈惟墳墓地。人間到処有青山」のつもりであったが、意志薄弱親に甘える心が多分にあった。明治四年岩倉公一行について米国に留学した七歳の津田梅女史のことなど思うと赤面のいたりである。

六月から八月末まで二ケ月の間は家事の手伝いや、鰻つりや母校高小の同窓会組織のため友人間を奔走したり、田舎の夏を楽しく過ごした。その間広島市に出て英語塾に入って英語の勉

強に数日を費した。このときある牧場に雇われ、未明に起きて乳しぼりを手伝い、炎天下牛乳車を引いて乳を配ったりしたが、これは文字通り三日坊主で郷里に引上げた。仕事と勉学が両立しないことを知ったからである。

八月末京都にかえり元の下宿に落ちついた。直ちに牛乳の配達にとりかかった。学校は九月一一日から始まった。一〇月二日の朝拝のとき大塚素先生から私が副組長に任ぜられたことが報告された。同日校長名で辞令が渡された。組長はだれであったか明かでない。

*

秋も酣となり例年の如く運動会が一〇月三一日上賀茂神社の芝生で行なわれた。競技の山は旗奪であった。五年生の杉本重三郎君（柔道初段六尺近くの巨漢、現在アルゼンチン在住）や高等学部の京野順八郎君（柔道二段）などが活躍した。この日社長兼校長の片岡健吉先生逝去の報が伝わった。正式の報告は翌十一月一日に行なわれた。越えて十一月五日に告別式が公会堂で執行された。学生生徒は一ケ月間喪章をつけた。そのため各一〇銭宛醵出した。本葬は先生の郷里高知で行なわれ、学生代表三名が参列し、その報告が十一月一〇日朝拝のとき公会堂でなされた。葬儀参列者は約一、〇〇〇名、見送人約二〇、〇〇〇人、高知市の北約一里の神遷寺に葬られた云々。更に十一月二十八日には先生の追悼会が開かれた。先生は衆議院議長の職に居られたから東京でも盛大な告別式があったのではないかと推測されるが確かなことは調べてみねば明かでない。

なお、同志社理事会は直ちに後任者を定めた。一一月九日朝拝のとき公会堂で後任は下村孝太郎先生が就任されたことがおおやけにされた。下村先生は熊本バンドの一人で、現理化学校設立の立役者であり、同志社引退後は大阪瓦斯会社の技師長および役員をつとめられたと記憶する。先生の宅は松陰寮のところにあったが今は北小松学舎に移し退修のために用いられている。

九日朝拝のとき下村社長兼校長が就任の挨拶をされ、その前座でオーテス・ケーリ先生（現ケーリ君の祖父）が片岡先生につき短い感話をされた。

「私たちが故片岡社長を敬慕する所以はその勝れた政治家たることや、同志社々長たることにあるのではなく、その立派な品性のゆえである。同志社精神なるものは愛神、愛人にある。しかるに昨日の礼拝に出席せるもの幾人あったか。これ私の憂る点である。諸君はよろしく同志社精神を振興すべきである云々。」

下村先生の挨拶は次のようであった。「同志社は一日たりとも社長校長を欠くことはできない。ここをもって不肖私がその任に推された。同志社は新島先生を失ない、片岡先生も失なうたが諸君はそのために元気を沮喪してはならない。同志社は、二〇〇〇年前に逝きしキリストの精神に立っている。故に不肖なる私が社長、校長たりとも動揺なく勉学されたい。」

十一月三日は明治天皇の誕生日天長節で恒例により公会堂で拝賀式が行なわれた。だれが勅語を奉読したか記憶にないが、

それまで、公立校の式になれていた私の日記には勅語の取扱い方がはなはだ粗略であったと記している。

この月の中旬播州において陸軍の秋期大演習が行なわれ、天皇陛下は統監のため播州に行幸された。十二日に生徒一同は京都駅にて御迎えをし十八日に御帰京のとき御見送りをした。学校は奉送迎につき公会堂脇の掲示板に公示を出したが誰かがそれに徒ら書きをしたらしい。十一月十八日の朝拝のとき中瀬古先生が次のような講話をされた。「礼儀は東洋の倫理である。支那においてはこれをもって国を治める基としたものである。そこで教育課目中でも礼を最も重んじたのである。文明とは西洋の言葉では都びたることを意味する。都の者は礼儀を知る。文明人は礼儀を守るということである。一、二年生諸君は田舎からきて間もない。都びていない。故に不行儀かと思うたが案外に礼儀正しく嬉しく思う。しかるに天皇陛下の行幸についての掲示に落書きをした者がある。これはエデンの園で蛇が人を誘惑したように同志社の近処に蛇が居るに違いない。諸君はこれを探索せんことを望む云々」いかにも中瀬古先生らしく諷刺にみちた話である。

十一月二十九日には同志社創立二八周年の記念式典が公会堂で行なわれた。式典の様子は惜しくも記していない。当日は日曜であったが日曜の礼拝との関係を如何にしたか明かでない。

十二月十八日公会堂で朝拝のとき一人退学、一人停学処分の報告があった。そのときの下村校長の訓示は「渇しても盗泉の水を飲むな」ということであった。あるいは処罰の理由が窃盗であったかも知れない。

＊

一二月二一日の夕方危険な失態を演じた。U君と共同で用いていたすわり机は足がねじ込み式であった。四本の足のうち一本がよく締っていなかった。肱をついて立ち上る際その足がぬけ机が傾いた。その拍子に上にあったランプが転覆した。ランプの油壺のネジがしっかりねじてなかった。石油が流れ出てパッと火が燃え上った。素早く座布団で打消し、燃えているざぶとんを窓から外の路上に放り出した。幸に通行人に当らずざぶとんの火は消えた。宿の主人、主婦に平あやまりにあやまって事は無事にすんだ。以後しめるべきものはしっかりとしめるべしという教訓を肝に銘じた。それからちょうど一〇年後の一九一三年の夏北米ロードアイランド州の夏場ウォッチヒルの日本雑貨店で働いていたとき、中二階のベッドの枕許のランプをひっくりかえしたことがあった。幸に油壺のネジをしっかりしめていたから石油は流れでず、火が消えただけですんだ。もしそのとき石油が流れ出て、火がついたなら、室の窓は三寸角の格子窓で開けることはできず、家と共に焼け死んだであろう。身をもって免れたとしても出火の責任を免れることはできず私の運命はどうなったかわからない。思えば運命の岐路であった。

九月に帰校してからは僅かばかりの牛乳配達を始め、得意増加に奔走したがさして成績はあがらなかった。その傍らI氏の周旋で中村という人の紙箱はりを手伝うこととなった。これは

U君も一緒であったと記憶する。学校からかえると四時頃から夜九時頃まで毎日仕事に通うた。一ケ月の労賃が一円にも足らないものであった。

そんな風で先きの見通しがたたず遂に退学して弁護士の書生にでもなって夜学に通うほかないと思い、U君とともに退学の決意をなした。U君は従来のごとく牛乳配りをしながら同じ処に下宿していたが私は早速I氏宅に厄介になることになり、年の瀬も迫った十二月二十七日に引越した。I氏宅は押小路烏丸東入北側にある二階家であった。I氏は私の近村の出身で私より一五歳ほど年長であった。志を立て上京し当時著名であった弁護士堀田康人氏の書生となり主に民事関係の法律上の知識を得、独立して無免許ながら弁護士同様の仕事をしていた。但し法廷に立つことはなかったと思う。相当に事件の依頼者があり生活は豊かであったようである。老祖母と夫人と女中の処へ私が加わったわけである。I氏の後嗣は三条大宮で立派なメリヤス店を経営している。

第二学期に入って毎朝公会堂に於ける講話を筆記したものが残っている。これをみると、米田庄太郎先生（社会学者、後京大教授に転出）五回、青木澄十郎先生（神学校教授、明治三七年頃退職最近九十幾つで逝去）二回、日野真澄先生（神学校教授、後神学部長、予科長、文学部教授、神学部中興の人）二回、通訳五回、大塚素先生（前出）四回、通訳一回、和田琳熊先生（心理学者、後文学部長大学長歴任、和田洋一氏厳父）二回、宇野重喜先生（陸軍中佐体育の先生、熱心なキリスト教信者）二回、加藤延年先生（地、歴、博物の先生、加藤延雄元校長厳父）四回、門田新六先生（漢学者）三回、田村作次郎先生（京大、大学院にて歴史研究中？）五回、ダンニング先生三回、ラーネッド先生二回、ケーリ先生（前出）三回、ワーレン先生二回、飯塚恒太郎先生（英語担当後予科英文学科教授、現関学飯塚博士厳父）一回、秦孝道先生（数学、後早大高等学院教授）一回、松山高吉先生（国文学者、文語体聖書訳者の一人）二回、千葉勇五郎先生（女学校教頭、現捜真女学校長千葉勇氏厳父）一回、外人来客四回等である。デビス博士の名が見えないのは多分休暇で帰米中であったと思う。その他鈴木先生（数学）が二回。

さてこの頃は日露の関係が逼迫して（翌三七年二月十日対露宣戦が布告された）、国民の関心はそれに注がれていたはずであるがその割合にそれに関する講話は少なく、市民も一般に平静であった。唯二つだけそれに関する講話があった。一〇月一日の田村作次郎先生の講話と一一月六日の門田先生の話である。田村先生は国民の第一の覚悟は品性を作るにあるとし門田先生は林子平時代から対外関心事としては露国を眼中においた。征韓論もそのためであった。我国は最早戦端を開かんとする。大に心胆をねり、昔日より目前に迫る露国を殪さずしてやまんや……」というにあった。

大塚素先生は「諸君のうちには将来わが国のために尽す大人物があるかも知れん。イエスは三〇歳までかくれていた。諸君も今は現われていないが将来大人物になる者があると思い畏敬

の念をもって諸君をみている」と激励し、二三回、ブーカー・ワシントンの話をされた。和田琳熊先生の幽霊の話が面白い。心理学者であった先生は次ぎのような話をされた。「幽霊なるものは我らに倫理上の教訓を与える。それは一つの我が他の我即ち良心を圧迫して、悪事をなすとき、良心の苛責の念に堪えずその勢が強くなるとその想念が客観化されてわれらの目に映じてくる。それが即ち幽霊である。それが多く夜現われるのは昼間は俗事に追われて良心の力が抑えられているが夜は良心の働きが鋭敏になり、その想念が客観化されて目前に現われるのである。（一〇月三〇日講演）

加藤延年先生の柿の話（十一月十一日）も面白い。柿という名は「あかき」からきたものである。その色の美、味の美、形の美等まことに美しい果物である。関ケ原戦のとき、徳川家康に美濃柿を献上したものがあった。家康は大柿（大垣城）を得たとて喜んだ。柿の美は人と土と空気と大陽の力と相まってなるものでこれ上帝の賜物である。これらのことを思うて食べるとその味は一層美味である」

いま一つ青木澄十郎先生の講話（十一月二〇日）を紹介する。

「犠牲ということは諸君が日常行なっているが通常大なる者のために小なる者が犠牲となっている。例えば今日日露の関係緊迫しているが、私一身を犠牲にして事が解決できれば私は進んで一身をささげる。しかるに大をもって小の犠牲となることはむつかしい。私に天野某という友人がある。この人は備後三原の商人であるがその祖先のことである。この話は春台雑話のなかにありますが、私はこの友人から直かにきいたのである。彼の祖先に天野三郎兵衛という三万石の地行をもつ武士がいた。彼は竹を切って積み置いたところ、これを盗む者があってだんだんと少なくなった。そこで足軽三人に命じて番をさしたところ果して盗人が現れてきた。足軽は直ちにこれを斬り捨てた。ところがこれは近所の百姓で徳川直轄地の者であって、徳川の威信を傷けたというのでその一人を渡せということになった。三郎兵衛は足軽は自分の命令を守ったので渡すわけにはゆかぬというて、三万石の地行を捨て去りました。これは大をもって小の犠牲となったのであります。足軽一人のために三万石の天野家を亡ぼした。そしてその子孫は一商人となった。われらもこれを学びたいものである」